

景の水溜りには青空を映さんか雲を映さんかを考へなどすべし。此場合に至らば決して急ぐべからず。先きに書きし光景は既に過ぎ去り又た最初に感じたる有様は更らに之れを究めん由なし。形は猶殘るとも色彩の關係は只だ自然に俟つの外何人も案出すること能はず。故に之れにて今日はお仕舞にするか。若し又たそれに満足せざれば明日天氣よくば再び來りて同じ有様の場合を畫くべし。漸く研究を經れば自得する處ありて困難も減ずるに至るべし。

次號以下には自然に對する態度並びに構圖につき氏の言説を譯出すべし。

從來日本では寫生の字を其物の通りに畫くのだと解釋して居つた。寫眞と同じものと思つてゐたが、西洋ではスケッチといふて花なら花を見て綺麗なものだと思ふ、その綺麗だと思つたことを畫く、これがスケッチ即ち寫生で、花の形ばかりを寫すのでなしに心を寫す、尤も形が出來なくては心が完全に寫せるものではないから、大に形の上の研究もやる、これが花とか山とか木とか家屋とか單純にそのものゝ感じを寫すのみでなく進んでそれ等を澤山に集合して一つの感想を自分から組立てる、語を換へていはゞ、寫生を組合せて一つのものを作るとなると、此時初めて繪畫の資格を與へられるものである、其實例は櫻の花の艶な處を寫さんか、單にこれのみなれば櫻の寫生といふべきだ、これに夜といふ境遇を被らせて、月といふ多情なものを添える、これが出來上るともう櫻の寫生ではなくて春の夜といふ繪になる、も一つは菜の一枝を瓶に挿んで見る、菜の寫生と瓶の寫生とが集まつて又一種の感想を作る、前の櫻と同じこととて單に菜の寫生ではない。(繪畫と寫生、中村不折氏)